碩心

財団法人　日本詩吟学院岳風会　認可

神奈川　碩心会　発行

60年6月号（155号）

発行者　根岸岳萃

編集　中村愛岳

60年6月現在会員数

逗子地区	170名
葉山地区	301名
大船地区	62名
（合計）	（533名）

良き師

会長　根岸岳萃

戦前詩吟を多少学んだ私が、柔道・剣道等の禁止された戦後、日本を思想的に立直らせるには詩吟が良いと、職場の親睦会の芸能課長をしていた安川天山さん（第二次世界大戦勃発時山本五十六大将座乗の旗艦長門の副長、碩心会再建時の会員でもある）に計り、会員募集したところ、約七十名の申込みがあり、その中に松本岳蔦（現他流）新田悠風（岳悠）先生がおり、その方を指導者として会を発足させた。

会員はすごく張りきって、職場だけでは飽き足りず、練習場を外に求めて、新田・石渡清風（故岳道）先生を講師として出発したのが現在の横朗吟道会、私は住所の関係で碩心会に入会し、当時三名程の会員と松井岳洋先生の指導をうけた。ほとんど鈴木篁岳先生（現吟友会員）と二人の時が多かったが、松井先生直々、長い詩や、和歌等の指導をうけた。

日本詩吟学院に入門以来三十年以上…詩吟が好きだったことは間違いないが、松井岳洋先生の人格に魅かれたことの方が強いでしょう。昭和四十年頃他派の大会に招待された時の吟を、興国流宗家の篠崎興国先生に大変褒められ、その折、戦時中興国流を学んでいた所謂先生の孫弟子です、と言ったことから、篠崎先生に大変ひいきにして戴き、余韻の指導や、吟の勉強によいからと、カセットテープを戴いたりしている。昨年の金港吟詠会の折、長時間にわたってお話出来、先生の在所横浜市の鶴ケ峰、重山重忠最期の地という処で琵琶を吹き込んだから聞いてくれと早速送って戴いた。ここで松井岳洋、篠崎興国両先生をみるに、お二人共酒も煙草もおやりにならない。又大会の反省会ではジュースを飲みながら私達酔漢のお相手をもの静かにされる。全く良き師を得たものとつくづく思う。

ところで弟子にも師を選ぶ権利があると言われますネ。三年探して師を選べとも…。私は本当に幸運にも日本を代表する二人のすばらしい師にめぐり逢いました。然し私が、はたして三年探して選ばれた指導者かと自戒しております。古今の詩歌の作者（偉人・傑士）の心までに及ぶとき、学んでも学んでも尽きる時がありません。吟道は本当に奥深いものです。これからも楽しく勉強をいたしましょう。

教場だより

逗子A支部・松井教場

発足59年4月、60年6月現在会員数12名指導者松井正風先生。

5月31日㈮根岸会長、千葉劒岳・香岳先生と一緒に取材を兼ねて松井教場へ。碩心会の教場としては最南端に位置する林に向って、期待を胸に海沿いを走る。

林の交叉点をほんの少しゆくと教場。到着してまず感じたのはよい教場に恵まれてるなァと思えたこと。玄関を入ると熱心な合吟の声が聞えてきた。暖かく迎えていただき席につけば、なるほど話に聞いていた通り、若手揃いで頼もしく羨ましき限り。

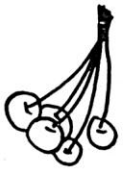
自己紹介ののち、女性の合吟〝生田に宿す〟を聞かせていたゞき、これに対し根岸会長から「息つぎ」「腹式呼吸」等についてアドバイスがあった。つゞいて一吟づゝ独吟を聞かせていたゞいたが、私なりに感じた事は、総体的に節調よく、吟が素直、そして高い音程が出るということが将来楽しみに思えた。

師に似ぬは鬼っ子……とかいわれますが、素直な吟はまさに松井先生に似てますネ。又以心伝心という言葉がありますが、松井正風先生の熱意がそのまゝお弟子さんに伝わっている感じで、希望に燃えている教室という印象をうけました。

又この教場の特色に、松井教場のきっかけを開いた中山潤夫妻をまじえ、四組の御夫婦がいられるということです。根岸先生の談話の中で、碩心会には30組以上の夫婦がいる事を話されましたが、私も常々、まず家庭を大切に、その上で趣味に励んで下さいと申しております。千葉先生御夫妻、又私達も今にして二人で同じ趣味を持ってよかったと胸を張って云えます。どうぞ末長く仲よくがんばって下さい。

お教室の雰囲気も、気ばらず、なごやかで、しばしの懇談の中に、根岸先生、千葉両先生達の経験やら懐古談ありで、すっかり皆さん心ひらき、吟友又一歩近寄った感がし、帰りの車中もふんわかとよい余韻にひたりながら帰路につきました。（愛岳）

（教場の方に書いていたゞきたかったのですが、〆切日切迫のため広報部でまとめました。私見が入りましたことお許し下さい。）



頼山陽（安永九～天保三 一七八〇～一八三二）

教本の目次をみると、頼山陽作詩のものが多いのにあらためて目をみはります。ちなみに書き列べてみると

不識庵機山を撃つの図に題す・八幡公・天草洋に泊す・述懐・前兵児の謡・本能寺・楠公子に別るるの図・母を奉じて嵐山に遊ぶ・母を憶う・侍輿の歌・蒙古来・楠河州の墳に謁して作有り・後本能寺・桜井の駅址を過ぐ・摂州路上・舟大垣を発して桑名に赴く・中秋無月母に侍す・静御前・母を送る路上の短歌・炊煙起る・青山歌

今言葉で言えば当時日本最大の文豪？だったろうと私は思います。山陽の著した二つの歴史書、天皇家の歴史を記した「日本政記」平家から徳川氏に至る武家の歴史を記した「日本外史」。又「日本楽府」には六十六編の詩が載せられていて、すべて日本史の挿話に題材をとった詩で〝静御前〟の詩等のように歴史的ロマンスを実にきれいに書いている点が評価されています。学問、詩のみならず、山陽はまた絵にもその才能を発揮し、中でも有名なのは耶馬溪の図であるという。

あじさいを訪ねて

鎌倉散策のおさそい

梅雨…すなわちうっとうしい季節と思いがちですが、そんな時こそ楽しさをみつけるためにも思いきって出かけてみませんか。

（と　き）

6月19日(水)　雨天の場合21日(金)

（集　合）

国電逗子駅　10時

（主なコース）

逗子駅＝（名越経由バス）法性寺（お猿畠・まんだら堂）＝長勝寺＝安養院＝別願寺＝八雲神社＝常栄寺＝妙本寺＝蛇苦止明神＝本覚寺＝鎌倉駅解散

◇ポイント…花のまんだら堂

史蹟の妙本寺

◇昼食持参・軽装で御参加下さい。

（秋元・中村）

武士の世の怨念と悲哀

妙本寺

北条政子が、伊豆で流人の生活を送る頼朝のもとに嫁いだのは頼朝31才、政子21才の時であった。頼朝の旗上げが成功し、二人の鎌倉での新しい生活を始めて三年目に政子は身ごもった。頼朝はぜひ男の子が欲しいと願い、妻政子の安産を祈るために作られたのが若宮大路の中央にある一段高い「段かずら」である。しかし安産の祈願をこめて作られたこの道は、やがて源氏の悲劇へ連なる道でもあったのである。

政子が身ごもって産所とされた所は比企能員（よしかず）の館であった。頼朝はいよいよ鎌倉に本拠を定めた時、有力な豪族・御家人達に土地を分け与えた。その中の一人に比企能員がいて彼は比企ケ谷に館を構えた。

この比企氏との関係は、頼朝は小さい時から比企能員の姑（妻の母）比企の尼に育てられました。当時身分の高い家庭では実の母は生みっぱなしといわれ、いわゆる「乳母」が若君の生活全体をとりしきる保育責任者でした。そこで頼朝は比企の尼の恩に報ゆるべく比企の館を与えた。そのような因縁で政子はそこで出産することになった。

そこで生れた男の子が後の二代将軍頼家だった。この比企ケ谷で頼家は源氏の御曹子として何不自由なく育てられた。そしてのちに比企能員の娘〝若狭の局〟を妻とし一幡という子供をもうけた。頼家の後ろだてとして比企氏の勢力はいっそう強くなり政子の実家・北条氏との対立が日に日に深まっていった。

建仁三年（一二〇三）頼家が急病にかゝり危篤状態におちいったのをきっかけに、北条時政は比企能員を自分の邸に誘い出して殺し、同時に比企の館を急襲して比企一族を滅した。このまゝゆくと頼家の子一幡が将軍のあとを継ぐのではという懸念から強硬手段をとったのである。不意をつかれ館は焼けて、若狭の局も一幡もすべて炎の中に葬られてしまったのです。妻、子供も殺された頼家は北条氏に立向ったのですが、病後の身でもあって失敗、あげくの果て、出家させられ西伊豆に幽閉され北条氏に殺されるという悲劇の二代将軍だった。

のち難をのがれた能員の末子、大学三郎能本が菩提を弔うために館跡に建てたのが〝妙本寺〟である。本堂の右側山裾に比企一族の墓、そして幼子一幡の廟所・袖塚がある。吾妻鏡によると、一族自刃の焼跡から菊の模様のついた着物の切れ端がみつかり、一幡の小袖と思われ納め葬ったものと伝えられる。遠い古えに思いを馳せ、武士の世の怨念と悲哀を思い、悲劇の中に幼い命を絶たれた一幡を思うと何とも胸が痛む。

（愛岳）

練吟メモ

○いくよ・くるよという女性漫才が出始めたころ、その芸名がなんとしても気になって仕方なかった。気にする方がおかしいのかも知れないが、でも、赤馬関で「三十六灘　行（ゆくゆく）尽きなんと欲す」と、吟詠の練習を続けて来たわれわれは、これを「いくいく尽きなんと欲す」と吟じたのでは、どうにも力が抜けてしまう。

○　富士の山を詠める　　山部　赤人

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く尊き
駿河なる　富士の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば　渡る日の　影もかくろい　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける　語りつぎ　言いつき行かむ　富士の高根は（旧教一）

右のように、奈良の時代には「行く」が使われており、特に平安時代に入って漢詩文が盛んになると、その訓読はほとんどが「ゆく」である。

○しかし、右と同じ万葉集中にも、まれに「いく」が使われていることがある。教本には見えないが、参考までに二首

大伴の　御津の泊に　船泊てて
竜田の山を　いつか越えいかむ
（歌番号三七二二）

天地の　神を祈りて　幸矢ぬき
筑紫の島を　さしていく吾は
（歌番号四三七四）

このような例を見ても、奈良時代からすでに「ゆく」と「いく」の両方が使われていたことが分る。

○因みに、教本の若山牧水の短歌二首

幾山河　越えさり行かば　さびしさの
果てなむ国ぞ　今日も旅ゆく

今日もまた　心の鐘を打ち鳴らし
打ちならしつゝ　あくがれてゆく

○俳句の場合、高段者の審査課題となる加賀千代女の次の句がある。

とんぼつり
今日はどこまで　いったやら

言葉は、大切に扱いたいものである。

俳句

石渡　桂風

鱚舟を　沖に落の夕日澄み
ふっときて　山の揚羽に檜の香
天草を　干して夜の香に漁師町

佐久間　爽風

夏柑を　もぐ香の中に兄おとと
梅雨入りかな　幾重に泛ぶ山の影
夏の蝶　群れそむ草の雨上り

～ぎんなん～

漢詩を趣味としている者が、四言（よんげん）古詩とか、五言（ごげん）または七言（ななげん）絶句などと呼称するのはおかしいです。言というのは字数の意味ですから、それぞれ（しごん）（ごごん）（しちごん）と読むのが、漢詩の世界の常識となっています。吟詠であっても、漢詩に関するかぎり、しきたりどおりの読みでないと適当でないと思います。

（入　会）

704 今村ふみ子　逗子市池子二ー二七ー七
（逗子A）（電）〇四六八ー七一ー九二七四

705 上間和子　逗子市久木二ー四ー一九
（逗子A）（電）〇四六八ー七一ー八六二九

706 中村萬寿雄　葉山町一色一一九二
（平　松）（電）〇四六八ー七五ー七四五三

707 島田勝一　横須賀市鴨居三ー五八
（逗子A）（電）〇四六八ー四三ー五五九四

（退　会）

224 笠原一山（長　柄）　519 山内法泉（大船B）